

## 三十三間堂の概要と歴史

1086年頃から100年ちよつとの期間、それまでの伝統を破って日本の政治と経済を直接コントロールしようとする天皇が続けて現れた。彼らの成功の鍵は「退位」にあった。退位することにより、巨額の富を自由に蓄えることができるようになり、幅広い政治的な策謀に従事することが可能になった。退位には、物理的に都から離れることが伴った。京都の都の公式な境界線のすぐ外側に、彼らは広大な寺院と宮殿が一体となった施設を建設した。それは、住居でもあり、政治的な司令部でもあった。多くの寺院では、退位した天皇を神聖化し、その新たな、超越的な「法皇」としての永遠の地位を確認するための儀式が行われた。三十三間堂は、日本史において特筆すべきこの時代を代表する記念碑的な存在である。その立地、建築様式、芸術的なモチーフには、皇室、貴族、そしてだんだん力を増しつつあった武士階級の間で競争が激化する時代の中における政治、経済、宗教の交錯が反映されている。

三十三間堂は、もともとは寺院と宮殿が一体となった広大な複合施設がその周囲に広がっていた。後白河上皇（1127～1192年）が1164年に、武家貴族の平清盛（1118～1181年）からの巨額の資金提供を受けて建設させたものである。この寺の名前そのものにも、その創建にあたっての理想が反映されている。正式な名前は「蓮華王院」であり、その意味は「蓮の花の王の寺」である。法華経に書かれている「蓮華王」という言葉を根拠とするこの名前は、後白河が日本の政治的な言説を超越して、法皇、もしくは転輪聖王（「普遍的な君主」を意味する古代インドの概念）になったことを示唆している。

より一般的な「三十三間堂」という名前は地名的な呼称であり、建物の物理的な構成に由来している。その意味は単純に「柱と柱の間の空間が33ある寺」というものである。ここでも、仏教的な影響がはっきりと表れている。33という数字は、すべてを見通し、すべてに対して慈悲を示す菩薩である観音菩薩が33の異なる姿になって人々を救済へと導くことができる、という信仰に由来している。観音菩薩が三十三間堂の本尊であるのも偶然ではなく、取り巻くお堂には1000体の小さな観音像が安置されている。12世紀におけるこの菩薩の人気の高さが、これだけたくさんの観音像が並べられていることからもうかがえる。この時代は、救済にいたるには、個人的な信仰だけでは十分ではなく、神聖な存在による手助けが必要であると多くの人々が信じていた時代であった。

後白河法皇が建設したもともとの寺院と宮殿の複合施設は、1249年の火災で全焼した。しかし、三十三間堂はすぐに再建され、その後750年間にわたって幾度かの大きな修復が行われてきたものの、今日も1266年に建てられた建物がそのままの姿で残っている。16世紀末、武将の豊臣秀吉（1537～1598年）が、東山エリアに新たに建設していた広大な寺院の伽藍の中に三十三間堂を組み込むことを決定した。その伽藍の中心となるのが新しい巨大な仏殿であった。敷地の南側の境界を示す南大門と土壁はこの時代に作られたものである。南大門と秀吉の仏殿とが正確に南北の軸線上に並んでいるのも偶然ではない。この南北の軸線は、現在、京都国立博物館の新しい入り口を横切るように通っている。

三十三間堂のユニークな様式や壮大なデザイン、そして素晴らしい装飾は、高く評価されている。また、三十三間堂は、天皇たちが「仏教的な王」という考え方や壮大な建築の力を活用して、真に超越的な地位を確立しようとした、日本史における短い期間の記念碑的な存在となっている。